

名詞文と外心構造

川 島 浩 一 郎

I. はじめに

動詞を述辞とする発話を動詞文 (phrase verbale), 述辞が動詞ではない発話を非動詞文 (phrase non-verbale) と総称する¹. そして(1)の *mes premières vraies vacances...* や *la première chose...*, (2)の *douloureux mystère de l'amour*, (3)の *le rêve*, (4)の *mon instinct*, (5)の *le brouillard* のように, 動詞記号素なしの名詞(句)を述辞とする非動詞文を, 特に名詞文 (phrase nominale) と呼ぶ.

- (1) Je me trouvais à Athènes lorsque j'ai appris la mort de Richard Brautigan. *Mes premières vraies vacances depuis dix ans. La première chose que je réussissais à me payer en écrivant des livres.* (Ph. Djian, *Crocodiles*, Collection J'ai lu, 1989, p.11)
- (2) Pourquoi être ainsi déchirée ? *Douloureux mystère de l'amour*, [...]. (F. Sagan, *Un certain sourire*, Collection Le Livre de Poche, 1956, pp.109-110)
- (3) Travailler la nuit à Paris, c'est comme être à la campagne. *Le rêve !* (F. Sagan, *Répliques*, Quai Voltaire, 1992, p.37)
- (4) — Comment le sais-tu ? — *Mon instinct*, [...]. (J. Anouilh, *Becket*, Collection Folio, 1959, p.32)
- (5) — [...], il fait beau à Hasting ? — *Le brouillard*, [...]. (*Becket*, p.92)

本稿の目的は, 名詞文の成立基盤を, 統辞的な観点から分析することである. 論述の手順は次の通りであ

る. まずⅡ.で統辞的な意味での「従属 (subordination) = 限定 (détermination)」を定義し, Ⅲ.で「統辞機能 (fonction syntaxique)」という概念に定義を与える. Ⅳ.では名詞の統辞的なステータスを確認する. Ⅴ.では「内心構造 (construction endocentrique)」と「外心構造 (construction exocentrique)」を定義する. そしてⅥ.では, 名詞文の成立と内心構造および外心構造との関連を記述する. 内心構造・外心構造という区別が, 非動詞文の成立基盤と密接な関係にあるからである.

Ⅱ. 「従属」の定義

文を構成する表意単位 (記号素や連辞, 連辞素) は, 必ずしも互いに同等の統辞ステータスを持っているわけではない. 従属は, 表意単位の間に見られる非同等性 (階層性) を示すための概念である.

- (6) Il porte *un pantalon gris clair*, [...]. (S. Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.252)

(6) の *un pantalon gris clair* はある色合いのパンツ (pantalon) であり, *gris clair* はある色調を帯びた灰色 (gris) である. この *un pantalon gris clair* において *pantalon* が中心的であるのに対して, *un* や *gris clair* は周辺的である. また *gris clair* において *gris* が中心的であるのに対して, *clair* は付随的である. 第一次分節にはこのような中心性と周辺性, つまり階層性 (hiérarchisation) が絶対に必要である. さもなければ言語表現のほとんどが, 記号素の単純な羅列でしかありえなくなってしまう. たとえば *un pantalon gris clair* の4つの記号素の意味関係は「単一性 + パンツ + 灰色

¹ 本稿ではMEILLETらの伝統的な見解にしたがって, 文を「発話の他の部分から, 統辞的に独立した発話」と定義する. MEILLET (1903) は文に次のような定義を与える.

A un point de vue purement linguistique, et abstraction faite de toute considération de logique ou de psychologie, la phrase peut être définie : un ensemble d'articulations liées entre elles par certains rapports grammaticaux et qui, ne dépendant grammaticalement d'aucun autre ensemble, se suffisent à elles-mêmes. (MEILLET, 1903, p.326)

またBLOOMFIELDが文に与えた次の定義においても, 独立性という概念は重視されている.

It is evident that the sentences in any utterance are marked off by the mere fact that each sentence is an independent linguistic form, not included by virtue of any grammatical construction in any larger linguistic form. (BLOOMFIELD, 1933, p.170)

+ 明るさ」のような概念の平板な並置から、想像や連想によって組み立てるしかないことになる。このタイプの伝達手段に限界があることは言うまでもない。

一方が中心的で他方が付随的な統辞関係を、従属あるいは限定と呼ぶ。より明確に定義すれば、次の三つの条件が満たされるとき、XはYに従属する(XがYを限定する)と言われる²。i) Xの出現がYの存在に依存する³。ii) Xの付加がYの統辞的ステイタスに本質的な影響を与えない。iii) 発話の他の部分(le reste de l'énoncé)に対してXが持つ統辞関係が、Yのそれとは異なる。

- (7) J'ai *une nature fidèle*. (N. de Buron, *Qui c'est, ce garçon?*, Collection J'ai lu, 1985, p.212)

たとえば(7)のuneとfidèleは、natureに従属している。(7)におけるuneやfidèleの出現は、natureの存在に依存する。実際(7)からnatureを消去すれば、それにもなつてuneやfidèleも(7)から姿を消す。またuneとfidèleを付け加えることは、(7)におけるnatureの統辞ステイタス(aiの直接目的)に本質的な影響を与えない。そしてuneやfidèleと発話の他の部分(j'ai ... nature ...)との統辞関係が、natureと発話の他の部分(j'ai une ... fidèle)との統辞関係と異なることは自明である。

また(7)におけるnatureは、une nature fidèleという連辞の中心部分として、動詞のaiに従属している。(7)からaiを除去すれば、natureはこの文の直接目的であるという存在理由を失うことになる。

- (8) Je rentre à *Paris* demain soir. (F. Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.12)

(8)においてàとParisの間にある統辞関係を、従属とは呼ばない。確かにàの出現はある意味ではParisの存在に依存しているし、逆にParisの出現もまたàに依存している部分がある。しかしこれは単なる依存関係ではなく、àを付け加えることは、Parisと発話の他の部分

との統辞関係に本質的な影響を与える。従属という概念は階層性を明確化するためのものである。一方の存在が他方のステイタスに影響するような関係を、従属に含めるべきではない。

- (9) *Mère et fille s'éloignèrent sur le trottoir de la Cinquième Avenue sans se retourner*. (M. Levy, *Toutes ces choses qu'on ne s'est pas dites*, Collection Pocket, 2008, pp.33-34)

(9)においてmèreとfillesの間にある関係も従属ではない。これらは発話の他の部分(s'éloignèrent sur le trottoir de la Cinquième Avenue...)に対して同じ統辞関係にある。このように発話の他の部分に対して同一の統辞関係を持つものは、従属ではなく等位関係(coordination)にあると言われる⁴。等位関係にある諸要素は互いに同じ階層にあるのだから、従属とは別物である。

- (10) [...], *tout le monde* pleure. (G. Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.254)
(11) Tu crois que c'est rose *pour tout le monde*? (Ph. Djian, *37° 2 le matin*, Collection J'ai lu, 1985, p.13)
(12) *Vas-y : crie, pleure*, j'aime ça... (G. Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.292)

名詞主辞と代名詞主辞の統辞ステイタスにも一瞥を加えておこう。これらは動詞に、統辞的に従属する⁵。名詞や代名詞による主辞機能は動詞がなければ現れないが、動詞は(主節において)述辞に特化した記号素であるから、名詞主辞や代名詞主辞がなくても述辞である。たとえば(10)のtout le mondeは主辞であるが、(11)のtout le mondeは主辞ではない(tout le monde自体にそれが主辞であるという含意はない)。また動詞がなければ(少なくとも動詞の存在が想定されなければ)tout le mondeは主辞ではありえないし、接辞的な主辞代名詞が現れることもない。要するに名詞(句)や代名詞が主辞であるためには、少なくとも、動詞記号素がな

² 本稿での「従属 = 限定」の定義は、MARTINET (1985)による。

³ 従属(限定)にとって本質的なのは、それが依存関係であることである。

(61) Je pense à des gens que j'ai connus. (*L'été meurtrier*, p.108)

依存関係の判別に曖昧さがあるように思えることがある。たとえば(61)において、à des gens...が動詞であるpenseに従属しているのか、あるいはdes gens...が連辞素であるpense àに従属しているのかの決定は、考え方にもよる。これは判定が曖昧な場合があるということに過ぎず、従属が本質的に依存関係であるという定義を変更する必要はない。黒とも白ともつかない灰色があるからといって、黒と白の区別が無意味になるわけではないのである。

⁴ 等位の定義に関しては、敦賀(1998)を参照。

⁵ 主辞が動詞に対する義務的従属要素であることについては、川島(2006)を参照。

ければならない。

他方、動詞記号素である (10) の *pleure* や (11) の *crois* は、従属節中でない限り、述辞としてしか使うことができない。そして動詞は、たとえ名詞主辞や代名詞主辞がなくても、(12) の *vas*, *crie* や *pleure* のように、命令文の述辞として使うことができる。

- (13) *Connais pas ce type.* (S. Japrisot, *Adieu l'ami*, Collection Folio, 1968, p.116)
- (14) *Savez à combien vous rouliez ?* (G. Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.160)

名詞主辞や代名詞主辞の有無は、動詞の発話の他の部分に対する統辞関係に本質的な影響を与えない。確かに名詞主辞や代名詞主辞が欠ければ、全体が文として不完全になることが多いが、動詞が(従属節でない限り)述辞としてしか使えない記号素であることに変わりはない。実際 (13) の *connais* や (14) の *savez* に見られるように、動詞の語形変化に痕跡が残ることもあるが、名詞主辞や代名詞主辞は表明されないことがある。端的に表現すれば、主辞は動詞に対する義務的な従属要素である。

Ⅲ. 「統辞機能」の定義

統辞機能という概念に定義を与える⁶。統辞機能は従属関係を前提にする。つまり統辞機能は発話の一部分(記号素、連辞、連辞素)が、発話の他の部分に(統辞的に)従属する場合にのみ生じる。従属することが、統辞機能を持つことの定義であると言い換えてもよい。

- (15) *Je peux avoir votre nom, s'il vous plaît.* (C. Krug, *Demain matin si tout va bien*, Collection J'ai lu, 2004, p.159)

(15) において、不定詞句である *avoir votre nom* の統辞機能は、動詞記号素の *peux* に従属することによって生じる⁷。つまり *avoir votre nom* は *peux* に従属するという統辞機能(直接目的)を持つ。一方 *peux* はこの文の他の部分に従属せず、述辞として「そこにある」だけで、それ自身に明確な統辞機能を担っていない。同様に *votre* は *nom* という名詞に従属することで統辞機能を担う。しかし *votre nom* の内部において *nom* には

明確な統辞機能はなく、名詞句の中心として「そこにある」だけである。また *nom* の統辞機能は、この連辞の外部に対して働く。(15) における *nom* の統辞機能(直接目的)は、*votre nom* という連辞全体の中心部分として *avoir* に従属することによって生じる。

- (16) *Louise est en train de parler avec des amis.* (P. Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.149)
- (17) *Pas vraiment... j'ai une idée, je joue avec.* (K. Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.239)

(16) において *avec* も *des amis* も、それぞれ単独では明確な統辞機能を持たない。これらが明確な統辞機能を担うのは、*avec des amis* という連辞全体が発話の他の部分(直接的には *parler*)に従属するからである。確かに *avec* は *des amis* がこの文に組み入れられるという統辞現象において、何らかの役割を担っている。しかしこの働きは、*avec des amis* 全体が (16) で担っているような明確な統辞機能とは別物である。ただし (17) においては、*avec* が明確な統辞機能を担っていると言ってよい。(17) の *avec* は、単独で発話の他の部分(直接的には *joue*)に従属しているからである。

- (18) *Mary aborde Bertha.* (F. Dorin, *La rêve-party*, Collection Pocket, 2002, p.217)
- (19) *On va chez Yvonne ?* (M. Levy, *Mes amis Mes amours*, Collection Pocket, 2006, p.148)

(18) の *Bertha* が持つ統辞機能(*aborde* の直接目的)は、主辞である *Mary* との相対的な位置関係によって標示される。(18) の *Mary* と *Bertha* の位置を交換すれば、今度は *Mary* が直接目的となる。(19) の *chez* と *Yvonne* の間にある統辞関係は、(18) における *Bertha* とその「位置」の間にある統辞関係と平行的である。(18) の *Bertha* がそれに相応しい位置で *aborde* に従属することによって特定の統辞機能を担うのと同様に、(19) の *Yvonne* は *chez* をともなって *va* に従属することで、所定の統辞機能を獲得している。要するに直接目的の「位置」は、他の表意単位の統辞機能を標示するという点では、前置詞の等価物である。そして、表意単位と結びつかない限り「位置」には明確な統辞機能がないのと同様

⁶ 第一次分節のすべてを統辞機能とする考え方もあるかもしれない。しかしこの考え方は、統辞機能という概念をつまらないものにしてしまう。表意単位であることが、すなわち統辞機能だということになるからである。

⁷ 不定詞、現在分詞、過去分詞に主辞はないが、主辞がないことによって、これらの内部の動詞記号素が消失するわけではない。不定詞は動詞記号素と不定詞記号素の連辞、現在分詞は動詞記号素と現在分詞記号素の連辞、過去分詞は動詞記号素と過去分詞記号素の連辞である。不定詞記号素、現在分詞記号素そして過去分詞記号素には、動詞記号素から述辞としての統辞ステイタスを奪う機能がある。

に、(19) の chez そのものに積極的な統辞機能はない。(18) において Bertha とその「位置」がいわば一体化することによって統辞機能が生じているのと同じく、(19) の Yvonne は発話の他の部分に従属するために、chez と一体化していると考えなければならない。

- (20) [...], ses ongles griffaient ses paumes *avec violence*. (T. Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.206)
- (21) Guilon sursauta *violemment*. (*Du passé faisons table rase*, p.55)

実際 (20) における avec violence の griffaient に対する統辞関係は、それが従属であるという点で、(21) における violemment の sursauta に対する統辞関係にほぼ匹敵している。(20) における avec と violence の関係は、(21) における viole と -mment の関係に平行的である。

- (22) Hélas, *méfiance et superstition* entachent trop souvent le bonheur pur d'un cauchemar qui s'arrête. (A. Girod-de l'Ain, *De l'autre côté du lit*, Collection J'ai lu, 2003, p.227)

(22) において entachent の主辞機能を受け持つのは、*méfiance et superstition* という連辞全体である。(22) の *méfiance* と *superstition* は、*méfiance et superstition* という連辞内部において互いに等位で結ばれている消極的な存在に過ぎず、個別の統辞機能を持たない。実際、無冠詞名詞である *méfiance* と *superstition* はそれぞれ単独では主辞として不完全である。要するに *méfiance* と *superstition* は、互いに発話の他の部分に対して同じ関係にあるというだけで、これらに明確な統辞機能はない。

等位関係にある諸要素は、発話の他の部分に対して同一の統辞関係を持つ (Ⅱ. を参照)。つまり等位の定義の本質は関係の同一性にあり、それが文中でどのような働きをしているかという機能の問題からは独立している。この事実は等位が統辞的な関係ではあっても、統辞機能と呼ぶべきものではないということを明瞭に示している。

- (23) Il faut *attendre longtemps* ? (*Et après...*, p.252)

一般に、述辞 (prédicat) は発話の他の部分に従属せず (したがって明確な統辞機能を持たない)、従属関係

がつくる階層構造の頂点に位置する。これは述辞の (統辞的観点からの) 定義そのものである。階層構造の頂点に位置する述辞には、統辞機能が不在である。そしてこのことが、述辞を中心にまとまっている文全体が、談話から統辞的に独立する基盤となっている。統辞機能が従属を前提条件とするのだから、統辞機能の不在は逆に非従属性 (つまり独立性) を含意することになる。たとえば (23) の述辞である faut は発話の他の部分に従属していないが、このことは、faut を階層構造の頂点とする連辞全体 (il faut attendre longtemps) が、談話から統辞的に独立していることと同義なのである。

Ⅳ. 名詞の統辞的ステイタス

動詞文において名詞 (句) の統辞機能を標示するためには、位置あるいは前置詞の使用が必要であることが多い (Ⅲ. を参照)。つまり、名詞そのものには、発話の他の部分に対する統辞機能は含意されていない⁸。また動詞文の述辞は動詞であるから、動詞文における名詞 (句) は従属的な要素だと考えてよい。

- (24) Toute notre vie est *souffrance*. (G. Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.128)
- (25) C'est *peine perdue*. (M. Chattam, *Le 5e règne*, Collection Pocket, 2003, p.401)
- (26) Il y a *erreur sur* la personne ! (F. Vargas, *Pars vite et reviens tard*, Collection J'ai lu, 2001, p.318)
- (27) Je suis Jacques Frégent, voici *Cédric*, [...]. (M. Chattam, *La théorie* Gaïa, Collection Pocket, 2008, p.57)

名詞 (句) が, être, c'est, il y a, voilà, voici などの他の表意単位と結び付くことによって、述辞の一部分としてのステイタスを獲得することがある。たとえば (24) の est souffrance, (25) の c'est peine perdue, (26) の il y a erreur, (27) の voici Cédric はどれも、主節において述辞に特化した連辞であるという点で、動詞記号素に匹敵している (Ⅱ. を参照)。つまり (24) の souffrance, (25) の peine perdue, (26) の erreur そして (27) の Cédric はそれぞれ、述辞の一部分であると言ってよい。述辞の一部分であるから、これらの名詞 (句) に明確な統辞機能はない (Ⅲ. を参照)。

- (28) J'entendais la musique au loin. *Les gloussements*

⁸ たとえば le matin や l'année prochaine などが副詞的に働くことがあるが、これらが常に副詞的なわけではない。

obscènes de ma sœur. (*Crocodiles*, p.102)

- (29) Selon eux, les questions importantes et vitales seraient réservées à une élite. *Imbécilité!* (*Répliques*, p.96)

- (30) — Quel âge as-tu? — *Seize ans.* (*Becket*, p.64)

(28) の les gloussements..., (29) の imbécilité, (30) の seize ans などに見られるように, 名詞 (句) が単独で述辞の位置に現れることがある。しかし, 名詞は述辞に特化した記号素ではないのだから, このタイプの名詞文の成立には, 文脈や状況, それぞれの名詞の語彙的な性格などによる意味的な支えが必要となる。また, 統辞的には述辞であるから, これらの名詞 (句) には明確な統辞機能はないと考えられる。統辞機能が不在であることは, 述辞であることと同義である (Ⅲ. を参照)。

V. 「内心構造」と「外心構造」の定義

一まとまりで統辞機能を担いえるような連辞を, 内心構造と呼ぶ。また, そのような性格を持たない連辞を, 外心構造と呼ぶ⁹。

- (31) Elle a un *petit ami*? (*Les yeux jaunes des crocodiles*, p.355)

たとえば (31) において, un と petit は ami に従属している (I. を参照)。そして un petit ami という連辞全体は, ami を中心に一まとまりとなって avez に従属している。つまり (31) の un petit ami は一まとまりで統辞機能 (avez の直接目的) を持つことになるから, 内心構造であると言える。

- (32) Tu dois trouver *ma petite vie bien ennuyeuse...* (*Les yeux jaunes des crocodiles*, p.418)

- (33) Tu *la* trouves *jolie*, ta chambre, ici? (*Les yeux jaunes des crocodiles*, p.355)

(32) において, ma petite vie bien ennuyeuse という連辞は一まとまりの統辞機能を担っていない (直接目的とその属詞)。したがって (32) における ma petite vie bien ennuyeuse は, 動詞 (trouver) に従属した外心構造だと考えられる。このことは (33) のような, la

と jolie が分離した構文の存在からも明らかである¹⁰。

外心構造は, 非動詞文の統辞的な成立基盤と密接な関係にある。

- (34) Trop futé, le patron. (*Pars vite et reviens tard*, p.283)

たとえば (34) の trop futé, le patron は, まとまって統辞機能を担いえるような連辞ではない。したがって外心構造である。この連辞が, 内心構造である le patron や trop futé あるいは le patron trop futé よりも, 文としての独立性が高いことに注目しよう。

明確な統辞機能を持たない外心構造は, 発話の他の部分に従属しないという否定的な性格を利用することで, 内心構造に対して相対的に高い独立性を獲得する可能性がある (Ⅲ. を参照)。従属性と独立性はいわば反比例の関係にあるからである。外心構造は, 動詞に従属しない限り, いわば「述辞にしかねない連辞」だと言ってよい。名詞文の成立には, この仕組みがかかわっていることが少なくない (Ⅵ. を参照)。

Ⅵ. 外心構造の名詞文

外心構造という概念を用いて (Ⅴ. を参照), 名詞文の統辞的な成立基盤を分析する。

明確な統辞機能を持たない外心構造には, 発話の他の部分に従属しないという消極的な性格を利用することで, 内心構造に対して相対的に高い独立性を獲得する可能性がある。名詞文の成立にも, この仕組みがかかわっていることが少なくない¹¹。

- (35) Un garçon impressionnable, ce Giacomo. (T. Benacquista, *La commedia des ratés*, Collection Folio, 1991, p.97)

- (36) Un vrai bonheur, ce tabac. (*La commedia des ratés*, p.122)

- (37) Ce week-end, repos,[...]. (T. Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.152)

- (38) [...], tel père tel fils. (F. Vargas, *Un lieu incertain*, Collection J'ai lu, 2008, p.349)

⁹ 内心構造と外心構造はもともと, 分布主義的な枠組みで定義されてきた。すなわち, 連辞XYがXあるいはYと同じ分布を示すとき, この連辞を内心構造と呼ぶ。そしてXYがXとYのどちらとも異なる分布を示すとき, この連辞を外心構造と呼ぶ。本稿では, この定義に修正を加えたものを用いている。内心構造と外心構造の定義に関しては, BLOOMFIELD (1933) や川島 (2002b) を参照。

¹⁰ 二次的叙述と外心構造の関連については, 川島 (2006) を参照。

¹¹ 非動詞文と外心構造の関係については, TSURUGA (1978) は次のように指摘する。本稿の記述は基本的に, この考え方を名詞文に適用したものである。

(35)から(38)でのように、並置された複数の名詞(句)が全体で外心構造となることがある(等位関係でない場合)。たとえば(35)の un garçon impressionnable と ce Giacomo は、それぞれ単独では内心構造であるが、Un garçon impressionnable, ce Giacomo という連辞全体では外心構造となる。この外心構造は明らかに、内心構造である un garçon impressionnable や ce Giacomo よりも、文としての独立性が相対的に高い。

- (39) Formidable, l'article ! (M. Levy, *Sept jours pour une éternité...*, Collection Pocket, 2002, p.155)
- (40) Très important, l'estomac. (F. Vargas, *L'homme aux cercles bleus*, Collection J'ai lu, 1996, p.194)
- (41) Traumatisée, la nana. (J.-C. Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.348)
- (42) Charmante, ta petite fête. (J.-C. Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.481)

(39) から (42) に見られるように、名詞(句)に、全体が外心構造となるような従属要素が加わることがある。たとえば(39)の場合、l'article に formidable を加えた formidable, l'article という連辞の全体は、発話の他の部分に一まとまりで従属する可能性を持たない。つまり formidable, l'article は外心構造である。同様に、(40)の très important, l'estomac も外心構造である。これら外心構造の名詞文は、内心構造である très important や l'estomac と比べて、独立性が相対的に高い。

- (43) Après l'effort, le réconfort. (B. Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.107)
- (44) Et pour ça, un seul moyen. (T. Benacquista, *Malavita*, Collection Folio, 2004, p.201)
- (45) Autour de nous, la montagne. (Boileau-Narcejac, *Les victimes*, Collection J'ai lu, 1964, p.6)
- (46) L'après-midi, promenade. (S. Japrisot, *La passion des femmes*, Collection Folio, 1986, p.69)
- (47) Et toujours, partout, la peur. (*L'Empire des*

Loups, p.408)

- (48) Enfin un compliment. (F. Beigbeder, *99 francs (14,99 euros)*, Collection Folio, 2000, p.101)

(43) から (48) では、名詞(句)の他に、全体が外心構造となるような副詞的要素がある。(43)の場合、après l'effort と le réconfort はどちらも内心構造だが、この2つをあわせた après l'effort, le réconfort 全体は外心構造となる。この連辞(après l'effort, le réconfort)は発話の他の部分に、一まとまりで従属する可能性を持たないため、述辞(階層構造の頂点)としてしてしか使うことができない。

- (49) — Saluez en Jésus votre Père abbé de notre part. — *Et le gamin ?* (Becket, p.93)
- (50) Bien joué, [...], tu marques le point ! *Et mes barons ?* (Becket, p.103)
- (51) La méditation ? Oui, d'accord. C'est très beau. *Mais la méditation seule !...* (R. Thom, *Prédire n'est pas expliquer*, Flammarion, 1993, p.136)

(49), (50), (51)に見られるように、名詞文の述辞である名詞(句)の前に等位接続詞が現れることがある。このタイプの連辞は通常、一つにまとまった統辞機能を持たない。一般に X et Y という等位関係の全体は、外部に対して内心構造である(Ⅱ.を参照)。また X あるいは Y もそれぞれ、内心構造でありうる。しかし等位接続詞をとまなう et Y タイプの連辞がまとめて発話の他の部分に従属することは、独立文との等位でない限り考えにくい¹²。したがって、たとえば(49)の et le gamin は外心構造である。そして外心構造である et le gamin は、内心構造である le gamin よりも統辞的な独立性が相対的に高い。

以上、名詞文の成立と外心構造との関連について考察した。全体が内心構造の名詞文の場合、統辞的な独立性は低く、独立文としての成立は語彙的な傾向や、文脈・状況に意味的に依存することが多い。一方、全体が外心構造の名詞文は、明確な統辞機能を含意しないという消極的な性格を利用することで、内心構造に対して相対的に高い統辞的独立性を獲得する可能性がある。

rien, sous les arbres du jardin est exocentrique, ou tout au moins, moins endocentrique que rien de tel, par exemple. Nous pensons que les énoncés nominaux sans les dits "actualisateurs" spécialisés sont plus indépendants quand ils sont exocentriques que quand ils sont endocentriques. C'est justement cette exocentricité même qui offre une indépendance. Le cas de rien n'est peut-être pas très explicite à cause du signifié de rien (même pour le cas de rien, nous pensons d'ailleurs que rien, sous les arbres, est plus indépendant que rien de tel ou rien). Mais le cas de fête, par exemple, est explicite. fête, ou une fête, ou une grande fête peut être difficilement indépendant, tandis que aujourd'hui une fête ou une grande fête parce que c'est la fin d'année paraît l'être. (TSURUGA, 1978, p.68)

¹² 非動詞要素と動詞文の等位については、川島(2001)を参照。

VII. まとめ

本稿では、名詞文の成立基盤を、特に内心構造および外心構造という統辞的な概念を用いて分析した。

- (52) La mayonnaise était onctueuse et le pain frais bien craquant. *Un bonheur*. (T. Jonquet, *Mon vieux*, Collection Points, 2004, p.29)
- (53) C'est ce que je cherche, *la police aussi*. (A. H. Japp, *La saison barbare*, Collection J'ai lu, 2003, p.234)
- (54) Aucune idée (T. Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.67)

一まとまりの統辞機能を担いうる内心構造は、統辞的な独立性が相対的に低い。統辞機能の存在は、発話の他の部分に対する従属を前提とするからである。したがって、(52)の un bonheur, (53)の la police aussi そして(54)の aucune idée のような内心構造の名詞文の成立には、語彙的な傾向や、文脈・状況の意味的な支えが必要である。

- (55) Un bijou cette machine. (M. Chattam, *In tenebris*, Collection Pocket, 2002, p.328)
- (56) Une vraie cochonnerie, ces allergies ! (*Funérarium*, p.368)
- (57) Fameuse, cette vodka. (*Saga*, p.100)
- (58) Formidable, hein, cette fille ? (T. Benacquista, *Trois carrés rouges sur fond noir*, Collection Folio, 1990, p.119)
- (59) Soudain, un énorme choc. (N. de Buron, *C'est fou ce qu'on voit de choses dans la vie!*, Collection Pocket, 2006, p.47)
- (60) Le sommelier faisait de même. *Identiquement le cuisinier*. (E.-E. Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.147)

他方、外心構造は、(55) から (60) に見られるように、一まとまりの統辞機能を担わない（したがって述辞としてしか使用できない）という消極的な性格を利用することで、内心構造に対して相対的に高い統辞的独立性を獲得する可能性がある。たとえば (55) の un bijou cette machine (外心構造) は、un bijou (内心構造) や cette machine (内心構造) よりも、統辞的な独立性が相対的に高い。

非動詞文を構成する要素の中で、どの要素が述辞であるかの判断には微妙な場合もある。文脈・状況や話者の

意図によって異なることも考えられるし、結局は述辞の定義次第ということにもなりかねない。たとえば (57) において cette vodka が述辞で fameuse はその従属要素であるのか、あるいは逆に fameuse が述辞で cette vodka が周辺的な要素であるのかの判断は、必ずしも容易ではない。

統辞的な観点から明らかなのは、fameuse, cette vodka 全体が外心構造だということである。述辞となる要素の性質も重要だが、それ以上に、この非動詞文の成立は全体が外心構造であることに支えられていると言ってよい。つまり (57) において、従属関係がつくる階層構造の頂点に位置するのは、fameuse でも cette vodka でもなく、fameuse, cette vodka という連辞全体なのである。実際 fameuse, cette vodka から fameuse が欠けても cette vodka が欠けても、この連辞全体の統辞的な独立性は低下してしまう。外心構造であることによって、全体が動詞文に匹敵するような統辞的独立性を獲得するのである。非動詞文の内部でどの要素が述辞であるかという問題は、重要度が相対的に低いと考えてよい。

[参考文献]

- BLOOMFIELD, Leonard (1933), *Language*, New York, Holt.
- 川島浩一郎 (2001) 「Une aspirine et ça passera 型構文と等位接続」『ふらんぼー』第 27 号, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 11-26.
- 川島浩一郎 (2002a) 『フランス語の非動詞文研究』, 博士論文, 東京外国語大学.
- 川島浩一郎 (2002b) 「内心構造, 外心構造について」『ふらんぼー』第 28 号, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 39-57.
- 川島浩一郎 (2006) 「二次的叙述をめぐる一考察」『ふらんぼー』第 31 号, 東京外国語大学フランス語研究室フランス研究会, 34-50.
- MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.
- MEILLET, Antoine (1903), *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, Hachette.
- TSURUGA, Yoichiro (1978), *L'Autonomie syntaxique en français contemporain (sa contribution à la communication linguistique)*, thèse de doctorat de 3e cycle, Université de Provence.
- 敦賀陽一郎 (1998) 「等位接続と統辞機能」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』, 東京, 三修社, 204-215.

